五行歌近詠二〇首

二〇一四年一二月一四日

佐藤　治

Great Waveが
どどっと砕け落ち
びしょ濡れになった
ような錯覚
北斎展のど迫力

少数意見が
無視され
リベラルが
口を噤む
沈黙の螺旋の怖ろしさ

雨が降っても
曇っても
その上には
青空がある
どこまでも果てしなく

ふるさとは
心の拠り処
いつでも帰っておいでと
やさしく
あったかい

妻に先立たれて
茫然自失の夫
夫を見送って
意気軒昂な妻
所詮夫婦はカマキリか

淳一が死んだ
情痴の世界を
文学にした
最後の文士
二度と出ないだろう

引揚船から
夜毎仰いだ
北極星
今も僕の中で
点滅している

「特攻」を惟う
誰が好んで
命を捨てるものか
この崇高な死を
無駄にしていないか

最高の頭脳の
不条理な死
組織という妖怪に
押し潰された
切腹ではないか

妻と秘境へ
長い橋
青い空
白い雲
未栄へ続く二人の吊橋

本も
衣服も
大切なガラクタも
迷わず捨てる
人生の片付けもの

天の川は
宇宙の渚
１３０億光年先の
宇宙の涯は
神のみぞ知る

旧満洲の
小学校同窓会が
遂に解散
大切なふるさとが
また一つ消えた

人生には
答の出ない
厄介事が
山ほどある
だからおもしろい

易しい人生は
つまらない
思い通りの人生は
退屈だ
一寸面倒な人生がいい

人生は
大きな芝居
芝居の中で
役者を演じ
自らを創り出す

泣き上戸
笑い上戸
怒り上戸
酒の力を借りる
人間のペーソス

善も
悪も
時間が経つと
曖昧になる
歴史は全て現代史

大賀ハスが
古代の扉を
ぎいっと開けると
ロマンの花が
ゆっくり開いた

淡墨桜は
大地にどっかと
根を張って
時を紡ぎ
人を惑わす